

2025 年度リサーチフォーラム in 大阪 案内

戦後美術教育の歴史的検討—戦後美術教育は何であったのか

有田洋子（島根大学准教授） 金子一夫（茨城大学名誉教授）

日時 2025 年 7 月 12 日（土）13:00～16:00 （終了後に懇親会を予定）

会場・後援 サクラアートミュージアム・サクラクレパス

540-8508 大阪市中央区森ノ宮中央 1-6-20 最寄駅 JR 線 or 地下鉄中央線「森ノ宮」

概要は金子の個人 HP（美術教育史研究所: <https://kazuo-kaneko.net/>）に掲載。

参加費無料 定員 50 名 会場参加者は上記 HP 記載のメールアドレスに **7/7 まで**に申し込んでください。

オンラインはライブ配信のみ予定（録音・録画不可）。Peatix で事前申込。参加時は顔・氏名・所属を要表示。

会場参加者のみの協議の時間と配付贈呈資料も用意しています。

1. 趣旨 未来は過去と現在を基礎としないと描けない。戦後 80 年たった、そして美術科教育学会は創立 50 周年を目前に控えている。今後の美術教育を考えるため戦後美術教育史の個別研究成果を発表し参加者と検討する。今回は、美術教育学史、美術教育運動史、地方美術教育史、美術教育材料史の個別的研究成果を用意する。

今回の会合と連動して、12/20 に代表:永守基樹、コーディネーター:北野諒・清家颯による「2025 年度リサーチフォーラム in 大阪—21 世紀における造形遊びの再布置化へ向けて」同会場で開催予定である。

2. 発表者と発表題目 その他

金子一夫 基調提案 戦後美術教育史研究の諸視点

有田洋子 戦後美術教育学の制度基盤の形成過程

〔美術教育学史〕

新井哲夫 戦後の美術教育運動 創造美育協会を中心に

〔美術教育運動史〕

長瀬達也 戦後地方美術教育団体の結成 秋田県における諸相

〔地方美術教育史〕

金子一夫 材料史の美術教育史 戦後初期の不透明水彩への転換

〔美術教育材料史〕

サクラアートミュージアム学芸員清水靖子氏のコメント。 菊地虹 技術支援等スタッフ

3. 基調提案

戦後美術教育史上の個別的問題の研究は、少ないながらもあつた。ただ戦後美術教育全体を見通す通史的研究はほとんどない。そこ戦後美術教育史全体を考える上の枠組みと諸問題を本リサーチフォーラムで検討したい。まず戦後美術教育史をいわゆる戦後の前提の呪縛を脱して冷静客観的に捉えたい。戦後の前提とは昭和 20 年 8 月を歴史的断絶と捉える視点、すなわちそこを歴史的起点として戦後美術教育史を構想する視点、教育理念における科学合理主義・民主主義・人間主義といった価値を自明とする視点である。これは何もそれらを否定するのではなく、それらを括弧に入れて相対化することである。

冷静に見れば昭和 16 年に美術教育内容の急激な高度化があり、それが戦後に継続している。戦後に戦時的題材はなくなったとはいえ、戦後的な美術教育は戦時下で始まっている。児童尊重の明瞭な意識も発生している。他教科の有力な実践者たちも戦時体制下で教科教育の大きな転換があつたとしている。逆に教育内容は混乱・低下したかもしれない。戦前のほとんどの教員が戦後に継続したのであるから、敗戦への反省が断絶をもたらしたと強調するのは現実を見誤る。多くの人にあつた戦前の超越的価値が空白となり、その空白を先の科学合理主義・民主主義・人間主義が埋めた。現在、それらの価値は現実によって虐げられている。

生産社会・消費社会・高度情報社会という社会史区分に見田宗介・大沢真幸の ABC の戦後社会区分を勘案する。

1. 生産社会 昭 13～51 戦後前期 A 理想・夢の時代 ①戦時下 ②生活 ③創造認識造形 ④系統

2. 消費社会 昭 52～平 1 戦後後期 B 虚構の時代 ①感性 ②意欲 ③表出

3. 高度情報社会 平 20～ 現在 C 不可能性の時代 現実への逃避 ①脱表出

以上のようにすると戦後絶対論から脱し、現在の課題も見えてくる。すなわち、未解決問題を完結させる供養としての美術教育史、超越的なものの回復、高度情報に対応する美術教育などである。

図の説明

日本の美術教育史では屢々欧米の刺激で新しい美術教育運動があつた。そして文部省より民間が先行する。戦後もアメリカの奔放な児童画様式が美術教育に不透明水彩をもたらした。美術教育雑誌も民間が先行してから半公的な組織の雑誌が続く。



「アメリカの子どものかいええ」
『幼児クラブ』3(1)S22.9.



『子どもの美術教室』
1号,S22.10.



『スクールアート』
創刊号 S24.1.